

中野 薫

夏の盛りに、搭乗客を満載にした旅客機が、エンジンの破壊で迷走した挙句、山塊に激突して殆どの乗客が死んだ。地面に当たるまで、数十分の短い時間だったという。

突然訪れた、自覚できる死。

その僅かな時間、残された幼い我が子への最後の慈しみの言葉を、墜落と供に多くの親たちが、メモ用紙や紙片に書き残していた。死ぬ間際まで親が子を思う。

俊治は身につまされて、その晩夏をおくった。

俊治のギャンブル癖はいまに始まったことではない。学生のころから麻雀、競馬、パチンコみんな手を出した。博才があるのか、生来の勘のよさがなせる業なのか、それで借金を重ねなどしなかった。異郷の地で束縛のない気ままな学生生活であった。咎める者もいなかった。とは言え、自身かなり小心者と自覚していて、うつつを抜かして嵌まり込みもしな

かった。

出世栄達を夢見るほど勤勉で情熱的な性格でもなく、学校を出ると周囲の環境にあわせて、生まれ故郷の下級官吏の職を得た。口を糊するためだけの安易な選択であることは己がいちばん心得ていた。

しかし、どんな平凡な人生にもそれなりの起伏はあるのだ。俊治は勤め先の公用バイクに乗って苦情先へ出向く途次に事故に遭った。パトカーに追跡された少年の車が、赤信号の交差点を突っ切り、横合いから信号に従い進行した俊治のバイクを跳ねたのだ。

左腕を複雑骨折する重傷を負ったが、公務中の事故であり、幸いにも、相手方の人間も身内が堅実な稼業の主であったので、独身の安官吏にしては法外といえる保障の金が入った。

半年ほど入院して、後養生で里の家に帰りブラブラしていた。そのときに、俊治の母親が近所に住む農家の末娘である悦子とのお見合い話を持ってきたのだ。入院中の半年の間、見舞い客といえは職場の人間ばかり。行きつけの飲み屋の女がひやかし半分に訪れたとき、独身の若い男にふさわしい艶めきが、僅かにあったに過ぎなかった。それを見かねた母親が、文字通り怪我の巧妙で得た金を無駄にせず、この際身を固めたらどうかと縁談を勧めたのだ。

三十間近になる息子の不甲斐なさを見かね、事を思い立つたのであった。

春雨の降る日に、藁葺きの屋根にトタンの板をかぶせた、

しかしながら坪の広い悦子の家を訪れた。

厩を造り替えたという離れの座敷で、悦子は母親の蔭に身を隠して現れた。流行に遅れまいとしたのであろう、髪のを控えめに染め、色白で目鼻立ちがすつきりし、鄙にもまれなという古臭い形容が思いつくほどの美形であった。

豪農の類の旧家でもなく、戦後の農地改革で、小作の勞いから抜け出た平凡な農家が出自の娘である。その観点からでは、俊治の家ともつりあいが取れた。

こんな器量のいい女性に彼氏がいない筈はない。俊治は平凡な自分の身の丈には、そぐわないのかも知れないとは思つた。しかし、向こうの母親の言葉の端々に、農家の末娘の縁としてはこの上ないという意味合いが、充分に見て取れた。たとえ、彼氏がいたとして、親が持ちかける縁に乗るほどの従順な性質の女性なら、取り得の少ない自分の妻としてふさわしいのかも知れないとも考えた。

俊治と悦子は名前を言い合ったあと、冗舌に言葉が踊る筈もない。親達が世間話に興じる間、互いに視線がぶつかる。悦子は大きな瞳で俊治をチラリと見て微笑をつくつた。

見合いといつても、義理やしがらみで縛られるものは何もなかった。互いに気に入らねばその場で別れたとして、どんな蟠りも残りはしないが、何の因果か話は進み、半年過ぎぬうちに式を挙げたのだつた。

それから年月は過ぎて、夫婦は二人の娘を得た。その間も俊治のガンブル癖は止まなかつた。ただ独身の若いときと

の違いといえば、今はすでに強い束縛感があることであつた。

妻の悦子は口に出して俊治のその癖を咎めるほどの高圧的な性質ではなかつた。ただ寡黙で勤勉な男ばかりの農家の身内には、暇にかまけて遊びに興じる風な者などひとりもいなかった。微かな不安を抱いていたであらう。

悦子は俊治の安いサラリーで日々を凌ぐ算段も十分にできた。しかもその俸給だけで、やりくりが厳しかろうとも思える額の預金を拵えまでしていた。それは俊治に内緒のへそくりという訳でもなく、俊治も筆筒内の隠し扉に治し込んであることは知つていた。

俊治はその預金に手を付けた。返せるあてはなかつたが、元は自分のサラリーから出たものであるという安い見積もりの上での行為であつた。

桜の花の咲くころにあつた金は梅雨が明けるところには尽きていた。安い見積もりはお定まりの高い因果を生んだ。悦子が夫のその背信に気付くのに、それほど日にちはかからなかつた。

悦子は突然ある日から、俊治の視線を避けて、必要以上口をきかなくなつた。それで使い込みがばれているのが俊治にも薄々わかつた。

どうやら俊治の博才や気ままな道楽もここが潮時らしかつた。

独り身であつたなら、このくらいの散財は何の異変にもならなかつたろう。しかし、所帯を持つての、この差し迫つた

出来事は、修復に手がかかり、まったく未知の領域のことであつた。

暫くしてやつと悦子が俊治に向き直つたと思つた途端、悦子は離婚届けに自分の署名と捺印までして俊治に差し出した。

俊治はそこまで思いつめた悦子に驚いた。

「お前たつたこれだけで別れようと言うの」

「子供はどうするんだよ」

「子供は私が引き受けて育てます」

俊治は子供を二人も産んでも、体形も若さも失わないでいる悦子には、女としての余ほどの自信が残っているの、だろうと、内心舌を巻いた。

「ちよつと待てよ。あまり突然過ぎて、俺、びつくりしたよ」

箱入り娘までではないが、それほど男の経験もない悦子にしてみれば、修復不能な夫の背信とまで、思いつめたの、だろう。俊治は可哀そうなことをしたと、大いに同情はした。

しかし、新婚当時の、悦子はおそらく忘れてしまつてゐるに違いない、悦子の性格を端的に示す挙措ふるまいを思い出し、その感情はすぐに消えた。

安っぽい情緒に流されるより、現実を重んじる、まったく打算的資質。

ハネムーンから帰つて間もないころ、悦子は独身時代の失業保険が手に入るので、手続き方々里帰りすると言う。予めの手筈で、殊更夫に断りなどいらぬありきたりの行いであ

ると。

新婚の甘く流れて行く筈の日々に、余りに現実的な所作を持ち込み、それに少しも違和感を持たない悦子に、俊治は驚いた。

「そんな事どうして結婚前に済ましてなかつたの」

悦子は時間がなかつたと言う。

「いくらお金が入るか知らないが、そんな、今ごろやらなくとも」

俊治は自分の側の言い分を言いかけて止めた。

言えば言うほど、いっばしの男としての尊厳を損ないはしないか。

その小さな諍いの後むしろ、俊治は悦子の自分にはない資質に、一目置かざるを得なかつた。

こういう算段ができるのは養子を取つてまで家系を継いだ、農家の跡取りの長女である悦子の母親からの影響に他ならぬ。

ただ違うのは悦子の母親は、跡取りとして家の経済的主導権を握れたが、悦子は専業の主婦であつて、夫の安い俸給を工面して、少しずつ積み立てる他にお金を残す方法はないということであつた。

専業の主婦がひとつの職業である、世間に認められたとして、自らで稼ぐ算段を持つていないなら、それは夫である男へのぶら下がりであることに変わりはない。主婦という役割を声高に主張して、その権利を言い募つても、現実とは遠く隔たつてゐる。

夫の稼ぎをやりくりする能力が妻にあつたとしても、夫がそのやりかたに協調しなければ役にたたない。

目立つた取り得のない男を夫とした女は、必ず一度は夫に失望する筈である。

俊治は悦子の悔しきは充分にわかつた。切り詰めた生計から得た糧を、己のみの楽しみに遣つてしまうことのできる類の男など、今まで生きてきた間、周囲にはいなかつたのである。

しかし、俊治にしてみれば、自分はその程度の男であつて、それ以上でも以下でもないことは、弁えている心算であつた。その身勝手な方便を、悦子に真に悟らせるには、まだ多少の月日がかかるだろうとも思つた。

男にも色々あるのだから、健全で安心できる日々の営みを続けたいと願う女側の言い分を、安易に押し付け男を御してしまおうなどとは、十年早いと、俊治は考えた。

「お前いつ気づいた？」

「いつつて、私がいくら世間知らずの田舎育ちだつて、誰だつて気づくわよ。馬鹿にしないでよ」

筆筒の引き出しに入れていた筈の、ルビーの婚約指輪が、車のトランクの隅から出てきた。それで不思議に思い、念のために長女の名義で貯めていた郵便局の定額預金の証書を確認すると、あるにはあつたが、解約のスタンプが押してありお金は引き出されていた。

俊治は迂闊な自分に腹が立つた。婚約指輪は質屋で金を借

りてすでに返済し、質受けして、本當に迂闊にも、元の場所に戻し忘れ、車のトランクに入れたままにしていたのを今思ひ出した。

預金を手をつけたことより、夫婦の重要な記念品であるべき指輪を、そんなに粗末に扱う俊治の無神経さにより腹が立つたと言う。

「わかつたよ。俺がまつたく悪い。返す言葉は一言もない。ただ君の思惑通りにすべてが進むわけではないことだけはわかつて欲しいし、弁えて欲しい。男なんて勝手に野蛮でどうしようもない生き物なんだよ」

「そんな理屈私にはわかりません。貴方のような男の人には従いていけないと言っただけです」

「別れたあとどうするつもりだ、お前。実家に帰るのか？」

「実家になんて帰れないわよ」
思いつめただけで、まだ後先の見積りは何もないことが、俊治にも容易く見て取れた。

「博打なんて金輪際しないよ。お前や子供たちを路頭に迷わすようなこと、決してしないよ」

親達の実りのない諍いの間、六歳の真弓と三歳の綾子は、安官吏の宿舎に等分に設えられた狭い庭先で、ずつとじやれあつていた。

嬉々とした屈託のないその声に促され、また励まされ、
「真弓、綾子川にでも泳ぎに行くか」

俊治は悦子を無視するふりをして、部屋の窓から、殊更に

大きな声で、娘たちに声をかけた。

車が激しく行き交うバイパスを離れ、田に囲まれた砂利道にハンドルを切ると、小さな商店が乾いた道の傍らに、埃にまみれてあった。

「川まで行ったらジュースも買えないからここで買って行く」

俊治が促したが、悦子は車の後ろの座席で窓際に座ったまま、そっぽを向き返事をしない。俊治は一瞬苦笑を漏らし、エンジンをかけたまま外に出て、店の前の販売機から冷えた缶入りジュースを数本買った。そして、それを窓際の悦子の鼻先に突きつけたが、悦子は猶も視線をよけて両手だけ差し出し、また無言のまま受け取った。

道路の幅がだんだん狭くなって車は傾斜を上り始めた。長女の真弓の方が年嵩らしく親達の不穏な空気を察したのか、妹の綾子がじゃれついてもいつもより少し邪険である。親子四人会話も沈み、道の脇の林から蝉の音だけが、けたたましく聴こえた。

やがて坂を上りきり木立が途切れ、左手の田んぼの端の空地に車が数台駐車しているのが見えた。そこに車を入れてエンジンをきくと、右手の林の向こう側からはしゃいだ人達の声が聴こえてくる。すぐ隣に駐車している車の中に脱ぎ散らかされた子供の衣類が見えた。

「ここで水着に着替えなさい」

俊治が真弓に言うのと、少し躊躇いながら悦子の顔を窺って

いたが、悦子が無言で頷いて見せたので、嬉しげに笑みを湛えた。

着替えに手間がかかる綾子と悦子を待たないで、俊治は真弓の手を引いて川辺の方に下りて行った。

山間を縫い下りてきた水が一举に川幅を広め、堰に落ちるまでの間に緩やかに流れをためた水面があつて、幾人かの子供たちが既に歓声を上げていた。

「真弓も綾子も川なんかで泳いだことないだろう？」

不安と好奇心が半々の真弓の表情を見ながら俊治が訊ねた。

「うん。でもここはプールみたいで泳ぎやすそうね」

と、楽しげに笑い声を上げる他の子供たちを見て安心しただけで、すでに両親の諍いの気配も忘れ、嬉々としてこたえる。

「あつちの堰の方に近づいたら駄目だよ」

俊治が後ろから真弓に声をかけると、振り向きもせず飛び跳ねて水に入った。

暫くして浮輪をかかえ独りで来る綾子の姿が見えた。水際の岩に腰を下ろして煙草を燻らしていた俊治の傍らに近づき、「綾ちゃん、こんなところで泳がないもん。プールがいいもん」

不機嫌な母親にも相当むずかつたらしく眼に涙をためている。

「そうか。プールもそのうち連れてってやるよ。でもここプールみたいだろ。見ろよ、お姉ちゃんは、あんなところで泳いでいるぜ。綾ちゃんもお姉ちゃんに泳ぎ習いなよ」

「でも綾ちゃんイヤだもん」

猶も駄々をこね水着のままその場に座り込んだ。

「じゃあ綾ちゃんジュース飲むか？」

「ジュースここにはないよ。ママが持つてるもん」

「またママといった。ママじゃないだろう、ちゃんとお母さんといいなさい」

「だつてママはママだもん」

俊治はわざと姿を見せない悦子に腹が立った。

車の方に戻ると、冷房も入れない車の中に悦子はいた。

「こんな暑い日によくそんなところにいつまでもいられるな」

「ジュースくれよ。綾子がむずかつて水に入らない」

悦子はまだ無言で、座席の上に剥き出しに置いていたジュースの缶を二本手渡した。掌がびっしりと濡れてしまうほどに露が浮いている。

「ちえっ・・もう温もってしまったてるじゃないか。お前いい年をしていつまでも拗ねてるんじゃないよ」

俊治は捨てぜりふを言つて、踵を返しジュースを一本ずつ両手で握り、川の方に戻つた。

梅雨明けの空は積乱雲が湧き、夏を待ちわびた健康な子供たちの声が、山間の川辺に響き渡つている。

泳ぎ飽いたらしい姉妹は、浅瀬で小魚を掬い取るあそびに熱中している。綾子はとつくに機嫌を直していた。

岩陰に座つていた俊治には見えないが、悦子がやつと川辺に來たらしく、真弓が氣付いて屈託なく手を振り笑いかけているのが見えた。俊治が立ち上がつてそつちに眼をやると暗い表情のままの悦子と眼が合った。

真弓と綾子は母親の屈折した気分など少しも忖度せず、直ぐにまた背を丸めて小魚を追う所作に戻つた。

俊治は悦子の暗い表情にうんざりして、ズボンの裾を捲り上げ、

「綾ちゃん魚いるかい？」

と殊更快活に声をかけながら川に入った。

「うん。お姉ちゃん一匹捕まえたけど逃がしちゃつた」

真弓が顔を上げ、残念で仕方がないという風に顔を顰めて見せた。

「そうか、それならお父さんが捕まえてやるよ」

二人の娘の傍らに近寄りながら、岸辺に立つて見ていた悦子の方を振り向き、ニタツと笑いかけると、悦子はつられて思わず笑みを作りかけたが、横を向きその場にしゃがみ込んだ。

川の対岸に石垣があり、樟の大木が葉を繁らせ、青錆に覆われた大屋根がその隙間から見えた。俊治は深みを避けながら川を渡りきり対岸に辿りついた。

枝の繁つた高い木立に阻まれてはいたが、葉叢の隙間から水面が見えて、人の声はすぐそこに聴こえた。

しばらくたつて、

「お父さん何処に行つたの?」

やっと、姿の見えない俊治に気づいたらしく、悦子が真弓に訊ねているのが聴こえた。

「さつき向こうの岸に渡つて行つたよ」

俊治は悦子と真弓の会話を、緑の衝立越し、新鮮な感覚で聴いた。

由縁の古い神社であるらしく、山の中にあるにしては荒れた様子もなく、掃き清められた境内の隅に落ち葉や屑の焼かれた跡があつた。本殿の格子扉の前に古びた木製の賽銭箱があつて、真鍮製の鈴が紅白の布で糾われた紐を垂らせてぶら下がつていた。

俊治は俄かに、あらたまつた気分におそわれ、ズボンの裾を元通りに下ろし、口にくわえていた煙草を地面に擦りつけて消し屑の焼かれた灰に突き刺した。鈴を振るとそれは思いもよらず大きな音を立て、静まりかえつた森の中に響き亘つた。

ズボンのポケットから小銭を掴み出し賽銭箱に投げ入れ、瞑目し掌を合わせて祈つた。

「家内安全、子供たちが健やかに育まれますことを」

俊治はどんな神殿の前にも立つても掌を合わせて祈るのはこのこと他になかつた。神に対し自らの幸いを祈るほど己の実人生に願いを託すなど取り立てて何もないと思つていた。

家内に滞りがなく、子供たちが健康に育つなら他に何の望みがあるかと裡で呟く。いつもはそのもう一つ奥で夫婦円満

を祈ることもあつたが、その時はまだ、素直にそれを祈る平明な気分にはなれなかつた。

陽が傾いて西空に夕焼けが広がつていた。

再び車に乗り込んで帰路、子供たちはバイパスに沿つた場所にファミリーストランがあると口を揃えて言う。

悦子は表情を緩めぬまま投げやりな態度をまだ続けていた。俊治が車をバイパスの方に向けずに、山の方へ転回すると、「お父さん道逆じゃないの?」

真弓が目敏く気付いて声をかけたが、俊治は無視したまま、離合するのも難しげな狭い山間の道を宛てもなく車を走らせた。

道沿いに見える川の流れも急になり、背の高い杉林を通り抜ける時、点灯しなければ前が見えないほどの闇に覆われた山の傾斜に建てられた杉の皮葺き屋根の家にも灯りが入つていた。俊治は以前の夏、職場の慰安会で虹鱒を食べに来た山荘であるのを思い出した。建物の脇の僅かな隙間に水の還流する濠が設えられてあり、養殖の鱒が舐めき合つて泳いでいる筈である。この先、家はなく山は深みを増すのを俊治は知つていた。アスファルトの道も途切れ、花崗岩が風雨に碎かれ砂礫と化したデコボコの隘路を猶も上つた。

車のボディを背丈の低い灌木や茎の堅い雑草に擦らせ撥ねつける音を立てて進むと、急に視界が開けた。車のライトの先に真新しい墓石が幾本も並び、造成されたばかりの墓地らしかつた。

俊治は車のエンジンをきり、ライトを消した。すると、瞬時に漆黒の闇にすべてが閉ざされた。

俊治は煙草に火を点けた。バックミラーに怖気づいた二人の娘の顔と、何気なさをいまだに装ってはいるが、最早恐怖に近いひきつり蒼褪めた悦子の顔が浮かんだ。

深閑と静まつた闇の中で、様々な虫の音がひとつになり、俊治は耳鳴りと間違えた。

一本の煙草を吸い終わり、開け放した車の窓から吸殻を闇の中に放り投げた。その灯は小さな弧を描き地面に落ちた。

俊治は内心動揺しながら、闇にかまけその動揺を隠し、強気の賭けに出た。

「真弓。綾子」

俊治は唐突に呼びかけた。

姉の真弓が、

「うん。何？」

素直に応じた。

「お母さん、お父さんが嫌いだって・・だから、お父さんここでお母さん捨てようと思う。どうだろういいかい？」

俊治が紋切型に言うので、

「お母さんだけ？」

真弓は不安を表した。

「いや。綾ちゃんと真弓はお父さんと一緒に帰るよ。お母さんだけここに置いていく」

俊治は息を凝らして黙りこくつたままの綾子に向き直り、
「綾ちゃんもいいだろう？」

綾子は、少し笑ってコクリと頷くのが、ようやく闇に馴れた眼にはつきりとわかる。

俊治は前を向いて悦子を見ないまま、

「聴いたか。子供たちも賛成だ。そんなに俺が嫌ならここで車を降りろ」

多分ありえないとは思いつつながら、悦子そのまま車を降りて、スタスタと漆黒の闇の中に歩み去つたらどうしよう、そうならないことを祈りながら抑揚をつけず、平静を装って言う。

それでも悦子は、頑なに言葉を漏らさないが、顔を伏せ全身を強張らせ、微かに肩先が慄えていた。

俊治は車から降りようとしぬ悦子に心から安堵した。

「子供を二人もこさえて何が離婚だよ。そんなもの甘えというもんだよ。夫婦なんて最初から大した間柄でもないんだよ」

「お前と俺なんて、別れる値打ちがあるのかよ？ 芸能人じゃあるまいし」

お互い取り得も何も無い、平凡な男と女に過ぎないのだ。

脈絡もなく色んな思いが一時に溢れたが、仕舞いには、自分でも何を言いたいのかわからなくなった。

「男と女の間なんて、この夜のような真黒な川が、流れてるんじゃないのか」

大仰な、唄の文句にある言葉を、ひとりごとで呟くと、妙にそれが実感になり、肌馴染んで言いつくし、それから先

は何も言いたくなくなった。

はじめりは、親のすすめた縁にのつたというだけの、薄い縁で結ばれたに過ぎなかつたにしろ、曲がりなりにも夫婦と呼ばれ、子供を二人までもうけて、何が別れようだ。薄い縁が徐々に深みを増すのは今からだというのに。口には出さなかつたが、俊治は心の底からそう思った。

俊治が寡黙になると、山の中にある墓所は闇と虫の声だけになつた。

俊治は続けさまに煙草を二本吸つて、おもむろに車のエンジンをかけ、

「じゃ皆で帰ろう。綾ちゃんの好物スパゲッティー？ 真弓はハンバーグ」

「うん。それとアイスクリーム」と綾子が続けた。

「やつぱり綾子は欲張りなんだな」俊治がからかうと真弓が囁し立てた。

「綾ちゃん欲張りの食いしん坊」

俊治はふざけ半分の高笑いをして見せた。それにつられ綾子と真弓もふざけ合い連れ合つて狭い座席の隙間に転げ落ちた。

俊治はチャリと、バックミラーに眼をやつて、闇の中で微かに笑つた悦子の顔を、確かに見た。

それから車を加速させながら、覺られぬように小さな溜息をひとつつ吐き、心の中で呟くのだ。

「子は錠か？」

関東地方の山中に飛行機が墜ちたのは、それからひと月後、お盆のころのことである。

「了」